

photo: Miyazaki Yusaku



日本酒の低迷は、外国人の目にどう映るのか。英国人の杜氏として、欧米で数多くの講演会をこなす木下酒造(京都府京丹後市)のフィリップ・ハーパーさん(46)に、日本酒の生き残り策を聞いた。

——日本酒にはまったきっかけは?

英会話講師として来日し、居酒屋で吟醸酒の香りに驚いたのが最初です。蔵に行ったり田植えをしたりするうちに酒を造りたいと思ったのです。

——販売不振の原因をどうみますか?

作り手側の責任が大きいのだと思います。規模の大小によらず、良い酒を造るメーカーはあるのに、地方の酒蔵が大企業の悪口を言うなど、業

界が一丸となってピンチを乗り切る雰囲気がないのです。魅力を伝えるPR戦略が必要です。

——アルコール添加に批判があります。

それは間違えていると思う。純米酒しか飲まないという人でも、利き酒をさせると多くの人が飲みやすいと選ぶのは添加のある本醸造酒です。いまの分類は、良い酒がわかりにくい制度だと思います。

——農家が農閑期に酒造りをする伝統的な杜氏制度が崩れつつあります。

先入観を持たない若者が酒造りに加わることは、業界にとってプラス。自由な発想で面白い酒ができる。ただ、私自身は先輩の杜氏から技術を教わったので、いつまでも「杜氏」と呼ばれたい。⊕